

「聖徳太子の銘文」

親鸞にとつて、聖徳太子とはどのような存在であつたか。今さら問うべきことではないかもしれない。だが、親鸞の言葉を拾っていくにつれ、疑問は次々と湧いてくる。なぜ、太子に関わる言及は、最晩年に、あるいは特定の著述のみに限られるのか。その大部分を占める「太子和讃」が、構成や用語法、内容、バランス等、諸々の点で他の代表的和讃と噛み合わないのはなぜか。そもそも、太子について語った痕跡がほとんど残っていないのはどうしてか。親鸞が見た太子の姿は、実はあまりにほんやりとしている。

自らの内面にあまりにも深く関わった事柄について、私たちはあまりペラペラとは喋らない。ときには沈黙もする。しかし、太子に対する親鸞の態度は、同じく親鸞にとつてかけがえのない存在である。師法然に対するそれとも明らかに異なっている。親鸞が法然に言及するとき、その焦点は常に、法然個人の「御智慧才覚」ではなく、「如来よりたまりたる」^{〔一〕}「ただひと」の信に定まっているが、しかし、法然はそこで確かに、語られている。からだ。親鸞の言葉の端々に見え隠れする法然に対し、太子はあまりに語られない。本銘文は、実に貴重なものである。

自分が何をしたとか、誰それがどうである、といった個々の事柄について、親鸞はいちいち語らない。そこには、それだけの理由と、重みがある。語られていないことであって踏み込もうというとき、何より最初に向き合うべきはこの、重みではないか。じつと耳を澄ませなければ、語らざる言葉も見つからない。

(元研究員 内記述)

現代語

「御縁起曰」というのは、聖徳太子の「いわれ」を語ったものです。「百済国」というのは、聖徳太子が日本にお生まれになる以前に、おいでになった

という国の名です。「聖明王」というのは、太子がその百済の国においてになったときの、その国の王の名です。「太子阿佐礼曰」というのは、阿佐太子という、聖明王の子の名です。「注一」。聖明王は百済で亡くなった聖徳太子を悲しみ恋慕して、太子の姿に似せて金銅の像を鑄造したのですが、聖徳太子が再びこの日本にお生まれになったと聞き、わが子の阿佐太子を勅使として、その金銅の救世観音の像をお贈りしたそうです。この文は、そのとき阿佐太子が礼拝して詠んだ文なのです。つまり、「敬礼救世大慈観音菩薩」と申し上げたのだと。「妙教流通東方日本国」というのは、上宮太子(聖徳太子)は仏法をこの日本に広く伝えていらつしやるのだと。「四十九歳」とは、上宮太子は四十九歳までこの日本に生きておいでになるのだ、と阿佐太子が申ししたというのです。贈られた金銅の救世菩薩像は、天王寺の金堂にお移りになりました。「伝燈演説」とは、「伝燈」は仏法を燈火に譬えたのです。「演説」は、上宮太子が仏教を説き広めておられるはずだ、と阿佐太子が申し上げたというのです。

また、新羅の国から上宮太子を恋慕って、「日羅」という聖人がやって来て「注二」、太子に礼拝し、次のように申し上げたそうです。「敬礼救世観音大菩薩」というのは、聖徳太子は救世観音でいらつしやる、と礼拝したというのです。「伝燈東方」というのは、仏法を燈火に譬え、「東方」、つまりこの日本に仏教の燈火をお伝えになつていらつしやる、と日羅聖人が申し上げたというのです。「粟散王」というのは、この日本は極めて小さな国だと。「粟散」とは、聖徳太子が粟の粒を散らしたような小さな国の王におなりになったと申し上げた、というのです。

〔注一〕「聖明王」：百濟、第二十六代目の王。五五二(五三八?)年、日本に仏教を伝えたとされる。『日本書紀』のほか、朝鮮の『三国史記』、中国の『梁書』にその名が見える。

〔阿佐太子〕：日本で聖徳太子の肖像を描いたとされる(唐本御影。有名な「太子と王子」の肖像画)。『日本書紀』以外、他国には記録がない。

〔注二〕「日羅」：太子が師事した僧であるという(聖徳太子伝暦)他。ただし、『日本書紀』では六世紀、百済に仕えた日本出身の官僚として記録される。

原文

皇太子聖徳の御銘文
 「御縁起曰 百済国聖明王太子阿佐礼 敬礼救世大慈観音菩薩
 妙教流通 東方日本国 四十九歳 伝燈演説一文
 〔新羅国 聖人日羅礼 曰 敬礼救世観音大菩薩 伝燈東方粟散王〕文

「御縁起曰」というのは、聖徳太子の御縁起なり。「百済国」というのは、聖徳太子、さぎの世にうまれさせたまはれたりけるにの名なり。「聖明王」というのは、百済国に太子のわたらせたまはれたりけるときのそのくにの王の名なり。「太子阿佐礼曰」というのは、聖明王の太子の名なり。聖徳太子をこいしたいかなしみまいらせて、御かたちを金銅にて、いまいらせたりけるを、この和国に聖徳太子うまれてわたらせたまうときまいらせて、聖明王、わがこの阿佐太子を勅使として、金銅の救世観音の像をおくりまいらせしとき、礼しまいらすとして請せる文なり。「敬礼救世大慈観音菩薩」ともうしけり。「妙教流通東方日本国」ともうすは、上宮太子仏法をこの和国につたえひろめおわしますとなり。「四十九歳」というのは、上宮太子は四十九歳まで、この和国にわたらせたまわんとする、阿佐太子もうしけり。おくられたまえる金銅の救世菩薩は天王寺の金堂にわたらせたまうなり。「伝燈演説」というのは、伝燈は仏法をともしびにたとえたるなり。演説は上宮太子、仏教をときひろめましますべしと阿佐太子もうしけり。

また、新羅国より上宮太子をこいしたいまいらせて、日羅ともうす聖人きたりて、聖徳太子を礼したてまつりてもうさく、「敬礼救世観音大菩薩」ともうすは、聖徳太子は救世観音にておわしますと礼しまいらせけり。「伝燈東方」ともうすは、仏法をともしびにたとえて、東方ともうすは、この和国に仏教のともしびをつたえおわしますと、日羅もうしけり。「粟散王」ともうすは、このくににはきわめて小国なりという。粟散というは、あわつづをちらせるがごとくちいさきくにの王と聖徳太子のならせたまはれたりともうしけりなり。

(『真宗聖典』五三三―五三四頁)

《参考》(断りがない場合、ページはすべて『真宗聖典])

◆上宮太子仏法をこの和国につたえひろめおわします

■上宮皇子方便し 和国の有情をあわれみて 如来の悲願を弘宣せり 慶喜奉讀せしむべし
 (五〇八頁「皇太子聖徳奉讀」)

◆仏法をともしびにたとえたる

■無明長夜の燈炬なり 智眼くらしとかなしむな 生死大海の船筏なり 罪障おもしとげかせられ
 (五〇三頁「正像末浄土和讃」)

◆阿佐太子 / 日羅

■そのとき百済のつかいにて 阿佐王子きたれりき 太子をおがみてもうさしむ 敬礼救世大慈観音菩薩 / 妙教流通東方日本国 四十九歳伝燈演説と礼しけり 儲君そのとき眉間よりしるきひかりをはなしたしむ(「大日本国粟散王聖徳太子奉讀」五二、五三頁目「底本親鸞聖人全集」二 和讃篇 二六一頁)

■日羅上人新羅より 難波の館にぞきたれりし これをあやしきこしめし太子ひそかにみそなわす / そのと

き日羅ひさまつき たなごころをあわせてぞ 敬礼救世観音大菩薩 伝燈東方粟散王と礼せしむ
 (同 一五二―一六三頁、同 二五四頁)

◆その他

■五濁悪世の衆生の 選択本願信すれば 不可称不可説不可思議の 功德は行者の身にみたり
 天竺 龍樹菩薩 天親菩薩
 震旦 曇鸞和尚 道綽禪師 善導禪師
 和朝 源信和尚 源空聖人
 聖徳太子 敏達天皇元年 正月一日 誕生したまひ。

仏滅後一千五百二十一年に当たれり。
 (五〇〇頁「高僧和讃」末尾の文)
 ■山を出でて 六角堂に百日こもらせ給いて、後世を祈らせ給いけるに、九十五日のあか月、聖徳太子の文をむすびて、示現にあずからせ給いて候いければ、やがてそのあか月、出でさせ給いて、後世の助からんずる縁にあいまいらせんと、たずねまいらせて、法然上人にあいまいらせて、又、六角堂に百日こもらせ給いて候いけるように、又、百か日、降るにも照るにも、いかなる大事にも、参りてありしに、……
 (六一―六六頁「恵信尼消息」)